



三国中学校だより

【校訓】誠心 自主 創造

— 主体的に学び、協働してよりよい人生と

社会を創る生徒の育成— 合言葉:進取果敢



小郡市立三国中学校

第 9 号

令和8年7月1日発行

文責 校長 米倉佳美

3年生「進路選択ガイダンス」を行いました! ~未来の自分を思い描く時間に~

6月24日(水)に、3年生を対象に13校の高等学校の先生方をお招きし、出前授業型の進路選択ガイダンスを実施しました。英語や数学、情報・工業・看護・芸能など、複数の分野から専門の先生に來校していただきました。子どもたちは、自分の興味関心に沿った講座を中心に3校を選んで授業や体験活動に参加し、新鮮な驚きと期待を胸に授業や体験活動に臨んでいました。先生方には、高校で扱われる内容を中学生にも分かりやすく、かつ、本格的に紹介していただき、今後の進路選択において主体的に考える機会をつくっていただいたことに感謝申し上げます。



生徒会拡大執行部のみなさんが、高校の先生方を出迎え、受付と図書室までの案内をしました。

授業後の振り返りでは、

「想像していた以上に学校ごとの雰囲気や学べる内容の違いがはっきりと分かった。」

「高校の選択肢って意外と広いということを実感した。」

「高校はただ進学する場所ではなく、自分の将来につながる大事な選択なんだという意識が強くなった。」

など、進路を見据えた前向きな言葉が多く記述されていました。

高校の先生方からは、

「内容の設定に悩みましたが高校の授業レベルを考えてもらえるようにしてみました。」

「真面目で気持ちよく、前向きに説明・授業を聞いてくれました。」

「とても素直な生徒が多く、活気ある学校だと痛感いたしました。」

など、ご感想やお褒めの言葉をいただきました。

本校では、義務教育から高等学校への円滑な接続を大切にしています。今後も地域の高校と連携し、生徒の可能性を伸ばす教育活動を充実させてまいります。



3年生家庭科「幼児とのふれあい体験学習」を行っています！

6月25日（木）に1・3・5・7組、7月2日（木）に2・4・6組の2日間に分けて、3年生の全クラスで「幼児とのふれあい体験学習」を行っています。この学習では、実践的・体験的な活動を通して、幼児にとっての遊びの意義や幼児との関わり方について理解できるようにすることを目的に取り組んでいます。

幼児を抱っこしたりおもちゃで一緒に遊んだり、保護者の方に普段の生活について質問したりしながら学びを深めています。抱っこするときの慎重な手つき、遊びのペースをそっと合わせる優しさ、できたことを一緒に喜ぶ笑顔など、幼児の気持ちを想像しながら関わり方を考えて行動する主体的な姿が光っていました。「自分もこんなふうに誰かに守られて育ってきたんだ」と自分自身の成長とも重ねているようでした。この学びが、自身の成長とつながるものとなり、今後のみなさんの生きる力となることを願っています。

この2日間は、延べ9名のお子様とその保護者のみなさま（本校教員も含む）にご協力をいただきながら実施することができています。生徒たちへの貴重な学びの機会を提供いただいておりますことに心より感謝申し上げます。



主体的な学びの充実に向けて！～学びを次の問いにつなげる～

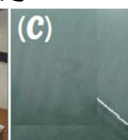
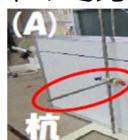
6月26日（金）に、3年生理科の授業公開を行いました。

三国中学校では、昨年度より「小都市主体的な学び推進モデル校（～R9）」として授業づくりを進めています。また、この「主体的な学び」をより促進させていくために、今年度からの2年間は、授業時数を柔軟に調整できる「教育課程柔軟化サキドリ研究校（～R9）」として文科省からの指定も受けています。この指定を活用し、文科省が研究校に課しているルールや制限に従い、教科の時数の一部を総合的な学習の時間に上乘せし、探究的な学びの機会を確保するようにしています。

「主体的な学び」とは本来、「もっと知りたい！」「本当にそうなのかな？」「自分でも調べたい！」「ほかの場合はどうなるの？」など、子どもたちの内側から生まれる知的欲求を充足させるために、課題解決に向けて自ら進んで学ぶことだと考えています。このような学びを、探究的な学びの時間に深く追究できるようにしていきたいと思っています。

今回の3年組

先生、3年組先生における「力学的エネルギー」に関する授業では、3つの



課題「(A)振り子が一回転するための杭の位置はどこ？」「(B)2つのコースを転がる球はどちらが速い？」「(C)レールを飛び出す球はどこまで上がる？」について、それぞれ解決したい課題を2つ以上選択して取り組みました。

授業後は、「スキージャンプはなぜあんなにとべるのか？」「摩擦や抵抗の計算方法があるのか？」「(B)で、球の重さを変えたり、コースの長さを変えたりするとどうなるか？」などの新たな「問い」が生まれ、今後の探究のテーマにつながっていく可能性にワクワクした授業となりました。

